

いのちに向き合う 中学・高校・大学の授業

臓器提供における家族の意思決定には、「ドナー本人の生前の意思」「家族メンバーの臓器提供に対する態度」「施された医療に対する満足度」の3要素が影響し¹⁾、家族間の対話の重要性が報告されている^{2)~4)}。小児臓器提供における家族の意思決定において、とくに、日ごろから親子で対話をし、お互いの想いを知っておくことが重要であるが、その機会は決して多くない。

家族との対話が生まれるもっとも有用なきっかけとして、学校の授業で取り上げられることが考えられるが、従来、中学校・高等学校の教育において、移植医療についての授業は、社会科⁵⁾、理科^{6)~8)}、総合的な学習の時間^{9)~10)}などで単発的に行われるにすぎなかった。しかし、大きな外部環境変化が訪れた。2019年4月より中学校において「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）が必修化され、7社の教科書に、移植医療が「生命の尊さ」を学ぶ題材として掲載された（表1）。これにより、多くの中学生が、移植医療について考える機会を得ることになった。

ここでは、その中学校の道徳科における移植医療に関する授業の実際、さらには高等学校、そして大学における授業の実践例を提示し、継続的に、移植医療を通して生命の尊さについて「自分ゴト」として考える機会について、提案する。

1 中学校における道徳科の授業 —臓器移植を題材に「生命倫理」について考える

1. 道徳科が扱う現代的な課題

これまで道徳科の教材として教科書に掲載されてきたものを振り返ると、生命の誕生の神秘や難病と闘う人の手記などが比較的多く、メッセージ性は大変強いが、生徒たちが自身の生活のなかで「自分ゴト」として考えるのには難しく、深まらずに終わってしまうことが少なかった。一方で道徳科学習指導要領解説には、それぞれの学年の発達段階をふまえ、表2¹¹⁾のような指導の観点が表示されている。

生命尊重の学習は、学校の教育活動全体を通じて行うべきものである。日々の授業や行事でも道徳科のあげる内容項目の一つ「生命尊重」を体験活動などで学ぶ機会はある。しかし、行事などでの学びは、生徒それぞれの立場や役割、また、その時々環境が微妙に異なり、同じ行事を経験しても、受け止め方が異なっている場合がある。

そのため、道徳科の授業で「生命尊重」を学習することは大切なことであり、しっかりとおさえておくべき重要な課題の一つである。また、現代科学や医療技術の発達に伴い、現代を生き抜く生徒たちは、今まで人類が経験したことのない問題に遭遇する可能性がある。そのとき、その問題か

表 1 中学校道徳科の教科書における臓器移植の掲載概要

出版社名	教科書名	学年	教材名	概要
学校図書	輝け 未来 中学校道徳	2	大きな木	兄の死により提供することになった苦悩（物語調）
教育出版	中学道徳 とびだそう未来へ	3	家族の思いと 意思表示カード	姉の死で苦悩する父母（物語調）
日本文教出版	中学道徳 あすを生きる	3	臓器ドナー	臓器移植をめぐる2つの立場
廣済堂あかつき	中学生の道徳 自分をのばす	3	ドナー	臓器移植をめぐる2つの立場
学研教育みらい	中学生の道徳 明日への扉	3	あなたの命は 誰のもの	移植医療に関して6人の立場からコメント掲載
光村図書	中学道徳 きみがいちばんひかるとき	2	つながる命	新聞記事として掲載
日本教科書	生き方を創造する	3	臓器移植を めぐる命と心	移植医療に対する考え方（随筆調）

表 2 中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳」内容項目の指導の観点

学年	指導の観点
小学校 1～2 年	生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること
小学校 3～4 年	生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること
小学校 5～6 年	生命が多くの人とのつながりのなかにあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること
中学生	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること

〔文献 11〕より引用して作成〕

ら逃げることなく、正面から向き合って、自分なりに判断し、よりよく生きていくことや、いかに医療技術が発展していくとしても、命への尊さについての考え方は普遍的に変わらないと判断できる力を育てていかなければならないと考えられる。「臓器移植」をテーマとした教材は、このような生命倫理について、生徒とともに考えることができる道徳科の教材であるといえる。

2. 授業実践①：A ちゃんの繋いだ命—臓器移植を題材とした「生命の尊重」

1) 教材と授業構成

筑波大学附属中学校における道徳科の授業実践例を提示する。

教材は、日本臓器移植ネットワーク（JOT）が 2016 年 2 月 25 日公表した、東海地方の病院でインフルエンザ脳症による脳死と判定された女兒の両親の手記である（図 1）。父親は、悩んだ末に臓器提供を決心したといい、女兒には「もしいやだったらゴメンね」と語りかけ、本人の代わりに下した決断に苦悩した。母親は、「お母さんをもう一度抱きしめて笑顔を見せて」と、娘を失った思いをにじませている。

本手記を教材に用いた意図は、「生命の尊さ」や「生きること」について、生徒らが自ら考える

パブリックコメント募集公開用
複写・引用・転載・頒布 厳禁

東海地方の病院で脳死と判定され、臓器提供をした6歳未満の女児の家族が25日、日本臓器移植ネットワークを通じて、思いをつづった手紙を公表した。女児はインフルエンザ脳症で入院し、提供は家族や親族13人の総意で決めたという。全文は以下のとおり。

Aちゃんが体調を崩して
からお父さんとお母さん辛
くてね。

毎日毎日神様にお願ひしました。目に見える物全てに、お山に行つてお願ひして、川が見えればお願ひして、海に向かつて……いろいろな神社なんかも夜中に行つてお願ひしました。最後には落ちてゐる石ころさんたちにもお願ひしたんだよ。

臓器提供するAちゃんへ

ることはできないんだつて。もう目を覚ますことはできないんだつて。もう長くは一緒にいられないんだつて。

お父さんとお母さんは辛くて辛くて、寂しくて寂しくて泣いてはかりたいけれど、そんな時に先生からのお説明でAちゃんがお父さんとお母さんみたいに涙にくれて生きる希望を失っている人の、臓器提供を受けなければ生きていけない人の希望になれることを知りました。

どうだろう？ Aちゃんはどう思う？ いやかな？ お父さんやお母さんは悩んだ末、Aちゃんの臓器を困っている人に提供することを決めました。もしやだつたらゴメンね。お父さんもお母さんも臓

繋がる命 愛情注いでね

る人たちがどんなにか辛く
苦しい思いをしているか知
っています。もしその人た
ちにAちゃんが役に立てる
なら、それは素晴らしいこ
とだと思つたんだよ。

「一人でも人の命を救う心で救う。ってすごく難しいことでお父さんもできなかったからない。だけど、とても素晴らしい、尊いことなんだよ。」

ことができたり、その周りの皆さんの希望になれるともしAちゃん人が人を救うしたら、そんなにも素晴らしいことではないと思つたの。こんなにも誇らしいことはないと思つた。Aちゃんが生きた証じゃないかわからない。今のお父さん、お母さんみたいに苦んでくる人が一人でも笑みになってくれればどんなに素晴らしいだろうと思つたの。

お父さんお母さんより

そして、その笑顔はお父さんやお母さんの生きる勇氣にもなるんだよ。

いつも周りのみんなを笑顔にしてくれたAちゃんだから、きっとまた世界の笑顔を増やしてくれるよね？

命は繋ぐもの。お父さんとお母さんがAちゃんに繋いだようにAちゃんも困っている人に命をつないでくれるかな？

願わくは、お父さんとお母さんがAちゃんにそうしたように、AちゃんもAちゃんが繋いだその命にありつたけの愛を天国から注いでくれると嬉しいな。

お母さんを
もう一度
抱きしめて
そして
笑顔を見せて

図1 授業教材（朝日新聞掲載記事）

態度を育てること、ならびに、手記に多くの価値（かけがえのない家族の絆、子を思う両親の愛情など）が含まれており、臓器移植という題材から、命の大切さ、家族愛、当たり前の日常を送れることの幸せなど、多面的・多角的に物事を考えさせることであった。

授業構成は、次の三段階である。

①展開：「臓器を提供することになった女兒の家族側」と「臓器提供を受ける側」のそれぞれの立場からグループトークを行い、多面的・多角的に考えさせる。

②中心場面：「A ちゃんがつないだその命」について考えさせ、父親にはどのような思いが込められているのかを考えさせ、生命の尊さについて考えさせる。

③終末で：母親の文章から「子どものことを思う親の思い」について考えさせる。

2) 授業を終えた生徒の感想

授業後の生徒の感想（原文まま）を示す（中学校3年，男子O君）。

命をつなげて他の違う命を救うって聞くと本当に凄いことだと思った。命ってなんだろう。生きているという象徴みたいなものだと思う。生きるってなんだろう。

悩むこと，考えること，悲しむこと，喜ぶこと，辛いこと，嬉しいこと。全部生きてるって言うことだと思う。そう考えると，本当に素晴らしいことだと思った。もし自分が父親の立場だった時「同じことができたか」と思うとできないのではないかなと思う。自分がいざそうなった時そんな簡単に結論は出せないと思う。だからお父さんたちの決断に感動した。Aちゃんはどんな気持ちだろう。やっぱりもっと生きたかったよな。人の役に立ててよかったのだろうか。Aちゃんがどんな気持ちだったかはわからない。けれど人の命を小さな少女が救ったって尊敬すべきことだと思う。

3. 授業実践②：救急医による講演

「Aちゃんの繋いだ命」の授業を実施した後，卒業期を迎えた生徒たちに中学校での学びの集大成として，「いのちを考える」をテーマとした授業を設定し，小児救急医（富山大附属病院・種市尋宙医師）による講演を行った。生徒たちにとって，小児科医は生活のなかで身近な存在ではあるが，診療以外で話を聞く機会はほとんどない。道徳の授業で「臓器移植」を題材に学習した後に，常に命と正面から向き合う仕事をされる現場の医師から話を聴ける機会は，大変貴重な経験である。以下に，講演を聴いた生徒の感想を一部紹介する（中学校3年，女子Aさん）。

臓器移植に関するお話をされると伺っていたので，その素晴らしさだと思っていた。しかし，実際には全く違い，あげたい，あげたくない，という権利があり臓器提供は正義ではないという言葉が私の偏見をとってくださいました。（中略）移植医療のことをしっかりと学習せず，移植という道を知らずに終わることは，間違いだと思います。だから私は，自分の親に縁起が悪いなど言われても自分の意思を示しておきたいと思うようになりました。それは，今回の学んだことを自分のこととして捉え，考え続けることが大切だと思ったからです。決めることは重たいけれど，今回の授業をきっかけに家族と話そうと思いました。本日はありがとうございました。

4. 道徳科の授業における考察

今日，教育現場で抱える課題は年々非常に多くなってきている。そのどれ一つをとっても彼（女）らにとっては重要なことであり，多感な時期に学習してほしいと願う課題ばかりである。

移植医療に関する授業を行うために配慮したことは，生徒に意思表示カードの記入を促したり，「臓器移植の有効性」のみを伝えるようなことをしたりすることなどは，絶対に避けなければならないということである。実際に中学校教育現場の教師には，そのような面から「臓器移植」を扱う教材にどのように向き合うか悩んでいる者も少なくない。しかし，「臓器移植」を題材に生命の尊さを考えることは，上記感想を述べた女子生徒Aさんのように，これからの自分の生き方について真剣に考え，そして家族との絆を考えることになるきっかけとなる。今後，学習したことを深めるためにも，学校の現場に，移植医療にかかわる医師やコーディネーター，移植者を招聘する環境を

整備していくことが大切になっていくと考える。

2 高等学校の保健体育科における授業

1. 中学校・高等学校の保健体育科における臓器移植の位置づけ

小学校、中学校、高等学校の各教科学習指導要領において、「臓器移植」という言葉が記載されているのは、高等学校学習指導要領保健体育編のみである。

中学校、および高等学校の保健体育科における授業構成を表3¹²⁾¹³⁾に示すが、中学校においては、(1) 健康な生活と疾病の予防の「健康の成り立ちと疾病の発生要因」や「健康を守る社会の取組」について学ぶ箇所、臓器提供・臓器移植が取り上げられるのが適切と考える。しかし実際には、4社の教科書のうち、1社の教科書においてコラム欄に記されている程度である。

一方で、高等学校においては、(4) 健康を支える環境づくりの「保健・医療制度及び地域の保健・医療機関」に関する単元で、臓器提供・臓器移植が取り上げられる。2社の教科書のうち、1社では詳細に記載されており、1社はコラム欄での記載となっている。

2. 授業実践：高等学校の保健体育科における移植医療の授業

高等学校2年間で履修する保健において、「生老病死」をテーマとした授業を展開している。1年次は、主に「生」にスポットを当て、日常生活のなかで「いのち」について、新聞やニュースを通して情報をキャッチし、友人や家族と自然に会話をする習慣が身につくように心がける。2年次は「老」「病」についても触れて、徐々に「死」について考えていけるようにしていく。そのうえで、誰にでも訪れる「死」について、高齢者問題、尊厳死・安楽死問題などを取り上げながら、今後の自分や家族に「死」が直面するような機会が訪れたらどうするかなど、これからの生活に結びつけて授業を進めていく。

移植医療については、2年目に約10時間かけて実施している(表4)。多様な人々が携わり、家族の気持ちが大きくかわる移植医療のストーリーは、現代社会において、生徒たちが「いのち」について考えることに最適な題材といえる。

授業を進めるうえでは、以下の5点に留意している。

1) 4つの権利(あげたい、あげたくない、もらいたい、もらいたくない)について導入でじっくり時間をかける。すぐに選択させるのではなく、ゆっくりと自分の意思を決定すればよいことと、その決定した意思は今後の人生の途中で何度も変わってもよいものであると繰り返し伝える。なかには、よく考えたけれど、まだ決まらないという生徒も多くいるため、「まだ決まらない」を加えて「4つの権利+1」としている。

2) 「死」とは難しい問題であることを念押しする。思考が緩やかになる傾向、および停止してしまう生徒もいたため、時間をかけながらリラックスするように働きかける。また、身内などの不幸の経験や、ペットが亡くなったばかりであるなど、授業を聞くことが辛いときには、保健室で休むことを前もって許可しておく。

3) 移植医療を勧める発言をしない。移植医療とは、生命科学の発展と、その医療への応用であり、現状の日本の倫理、法律、社会問題に即して、正しい知識を理解したうえで、自分ゴトとして

表 3 保健体育科における授業構成

	3 年間の時間数・単位数	保健分野の授業内容
中学校	体育分野：267 単位時間程度 保健分野：48 単位時間程度	(1) 健康な生活と疾病の予防 (2) 心身の機能の発達と心の健康 (3) 傷害の防止 (4) 健康と環境
高等学校	体育：7～8 単位 保健：2 単位*	(1) 現代社会と健康 (2) 安全な社会生活 (3) 生涯を通じる健康 (4) 健康を支える環境づくり

*原則として 1・2 年次に履修

〔文献 12) 13) より引用して作成〕

表 4 高等学校の保健体育科における移植医療の授業カリキュラム例

1 時間目	導入，4 つの権利＋1
2 時間目	脳の特徴，脳の機能局在
3 時間目	死とは，死の種類（心停止と脳死）
4 時間目	提供と移植，臓器の種類
5 時間目	脳死と植物状態の違い
6 時間目	許容（搬送・手術）時間，法的脳死判定
7 時間目	世界の歴史，日本の歴史
8 時間目	欧米との死生観の違い，件数
9 時間目	免疫，拒絶反応，HLA，匿名の原則
10 時間目	コーディネーターの講義
11 時間目	問題点，まとめ，宿題提示（図 2 を使用）

考えることの重要性，および決まった考えや正解がない点を強調している。知識を詰め込むのではなく，いかに生徒たちが主体的に，自分で考えるかという点に重きを置いている。

4) 「臓器提供意思表示カード」は提示するのみで，全員に配布しない。その理由は，「提供したい人が持つカード」であると誤解する生徒も散見されるためである。家族と話し合いを行った後に希望する生徒のみにカードを手渡すことで，誤解を避けている。

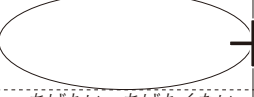
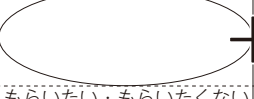
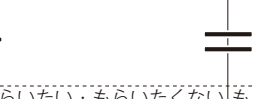
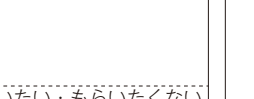
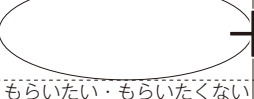
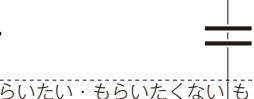
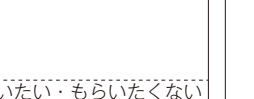
5) 最後に「家族と話そうシート」（図 2）を配布し，家族と話す時間を設けるように働きかける。

3. 授業に対する生徒と保護者の感想，および考察

毎回の授業後にリアクションペーパーを書く時間を必ず設けている。以下に，生徒と保護者の反応の一部をあげる。

臓器移植について学び，自分の死，他人の死を考えると，生き方が変わってきた。

☆講義でもお話ししましたが、「4つの権利+1」を前提として、無理のない範囲で考えてください
 ◎答えが出ないときは、自然と答えが出るまで待つのも大切です

	自分の気持ち	家族（親）の気持ち	結論
家族（親）が 脳死になったら			
	あげたい・あげたくない	あげたい・あげたくない	あげたい・あげたくない
自分が脳死に なったら			
	あげたい・あげたくない	あげたい・あげたくない	あげたい・あげたくない
家族（親）が移植を 必要になったら			
	もらいたい・もらいたくない	もらいたい・もらいたくない	もらいたい・もらいたくない
自分が移植を 必要になったら			
	もらいたい・もらいたくない	もらいたい・もらいたくない	もらいたい・もらいたくない

◎この気持ちは時々確認しましょう。途中で変わってもかまいません

◎臓器移植について、いい・悪いを伝えに来たものではありません

あくまでも生命科学の発展と、医療への応用を日本の倫理、法律、社会問題に即して、みなさんに知ってもらい、そして考えてもらっています

年 組 氏名

図2 家族と話そうシート

日本人の考え方と海外の考え方の違いを知り、今でも臓器移植についてテレビや新聞に載っていると、目を向けて、家族と話合っている。

私は小学生の頃、よく平気で友人に向かって「死ぬ」という言葉を使っていたことがありました。けれど、授業を受けてから、そのような言葉を軽々しく言うてはいけないことがわかりました。反省しています。

小学3年生の時に父を亡くしました。今まではただ辛いだけでしたが、先生の授業を受けて新しい考えや知識が増え、今までと違った視点から死に向き合うことができるようになりました。

誕生から死ぬまでの過程を学び、考え続けることができるようになりました。何気なく生活していたけど、生や死を考えるようになって、1日1日を大切にするようになりました。

週に一度、夕食後に娘から話しはじめ、家族で討論する貴重な時間をもてました。

移植医療についての授業において、ただ単に知識を提供するのではなく「いのち」について考える“きっかけ”を提供することに重きを置いて授業計画の作成に取り組み、実施している。上記のとおり、授業を通し、自分ゴトとしてアウトプットすることによって、自らの考えが形成され、死

生観が変化していく様子がわかり、その成果が認められる。

3 大学における一般教養の授業

1. 大学において教育を継続する意義

大学生は、運転免許証の新規取得、健康保険証の入手など、意思表示媒体に触れる機会が人生でもっとも多い。医療系の大学生は、生命倫理、および専門の授業で移植医療に触れる機会があるが、大学生のうち87.3%を占める非医療系大学生は、移植医療を通して命について向き合う機会がほとんどないのが現状である。より多くの大学生に、「生命の尊さ」を考えつづける機会を提供するためには、一般教養における授業の提供が適切と考えられる。

2. 授業実践：「移植医療と良心」

同志社大学の一般教養における授業実践例を提示する。

「良心学：良心を実践する」と称するオムニバス授業のうち、「移植医療と良心」をテーマとした2回の授業を実施した。学部を越えて多くの受講者がおり、移植医療と良心とは親和性が高いと考えたためである。

授業の到達目標は、①移植医療を社会システム、科学技術コミュニケーションの視点で考えること、②移植医療における良心とは、臓器提供をすることではなく、自己の内面と対話し、同時に社会的な問題にも関心を向ける（自己・他者とともに考える）ことであると気づくこと、③臓器提供の意思決定は自己決定の一つであると認識すること、である。また、高校生までとは異なり大学生では、意思決定をして意思表示行動の意図をもたせることを行動目標とし、その意思表示行動の変容メカニズム¹⁴⁾に基づき、授業コンテンツを設計した（表5）。

1回目の授業は、自身、家族、レシピエント、ドナー家族と異なる立場で考えた場合に生じるギャップの要因について深く考え、問題意識をもつことを目的とした。2回目には、その問題を解決するために自ら何ができるのかを考え、行動意図をもつことを目的としたPBL（project based learning）型授業とした。

なお、授業による変化を測定するため、回答への倫理的配慮を行ったうえで、1回目の開始時、2回目の終了時に、移植医療に対するイメージ、態度、知識、意思表示の行動変容段階、意思決定の意味についてwebアンケートツールで調査を行った。

3. 授業の結果と考察

2017年度、2018年度の受講生のうち、定量調査への回答者1,022人における分析結果を提示する。

臓器提供に対する授業前のイメージについては、役に立つ（84.5%）、よいこと（79.8%）と感じている一方で、不安（74.4%）、身近ではない（83.3%）と感じていること、すなわち、役立つよいこととは思いますが、自分ゴトとっていないという現状が示された。知識については、正答率が13.5～75.5%と幅があり、提供プロセスに関する正答率が低かった。2回の授業後、正答率は増加し、不安、身近ではないというイメージが減少した。授業前後の意思表示行動について、YES/NOにかかわらず意思決定率は26.1%から35.9%に、意思表示率は8.8%から13.6%に増加した。ま

表5 大学の一般教養における移植医療の授業コンテンツ例

授業 1 回目：移植医療を多様な視点で考えるアクティブラーニング型授業
1) 授業の目標・概要説明、web アンケート調査への回答 2) 多様な立場で考える①：4つの権利について、自身、両親の場合を考え、そのギャップがなぜ生じるのかを考えて、グループ討議を行う 3) レシピエントのお話し（30分）：移植前後の実際だけではなく、移植者の葛藤について知る 4) ドナー家族の立場を知る（ビデオ5分）：ドナー家族の思いを知る 5) 多様な立場で考える②：各立場を知ったうえで自分の意思に向き合い、知る前との変化について考え、グループ討議を行う
授業 2 回目：自己決定の重要性を認識し、主体的に問題解決を目指す問題解決型授業
1) 前回アンケート結果のフィードバック：現状を認識する 2) 意思決定に必要な正確な知識の提供：誤解を解き、知ることによって不安が軽減する体験をする。どのような知識が態度決定に影響を及ぼすかを考える 3) 自己決定に必要な要素を考えるワーク：なぜ自己決定を躊躇するのか、どのような要素があれば決定したいと思うのかを考え、共有する 4) 主体者となるワーク：大学生を対象に意思表示の輪を広げる主体者になった場合に、どのような施策を策定するかを考え討議する 5) web アンケート調査への回答

た、臓器提供の意思決定について想起する言葉に関するワードクラウドによる分析の結果、授業後には「家族」「誇らしい」が頻出した。

多様な立場の視点取得に基づき考え討議すること、意思決定に必要な正確な知識の主体的取得、当事者意識の醸成で構成する授業が、不安を低減し、意思決定を自分ゴトととらえてその行動に対する自己効力感が醸成されることが示唆された。

4 いのちに向き合う継続的な教育に関する提案

中学校、高等学校、大学の授業実践を通して、移植医療を題材として「生命の尊さ」を考える教育の重要性が確認された。今後、中学校、高等学校、大学、そして社会人に至るまで連続的に、移植医療を通して生命について自分ゴトとして考える機会を提供する環境整備を行う必要がある¹⁵⁾。

教育の拡がりに伴い、移植医療の専門家ではない教師がその教育に携わる。専門用語の解説や当事者の声、多様な模擬講義などを参照できる授業準備のための支援ツールが必要である。これに関しては、本書監修の研究班にてwebサイト¹⁶⁾を開設しており、活用されることが望まれる。

また、今後さらに実践が進み、自我寛容（自分とのかかわりのなかで登場人物との心情を共有すること）が深められる授業が多くの学校で展開されていくことが必要であり、そのためには、教科書へ掲載される教材も洗練されていく必要があると考える。

一方、各学校においては、教育課程を軸に教育の改善・充実させた「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが望まれる。そのなかで、生徒たちが「いのち」についての考えを深めるため、移植医療の授業は、教科化された道徳と、理科、社会、保健体育、総合的な学習（高等学校は総合的な探究の時間）の時間を中心に、小学校・中学校・高等学校、大学との接続を意識し、発達段階をふまえて系統立てていくことが不可欠である。

どのように生き、どのように死ぬか、決めるのは自分である。しっかり決断ができるように若いころから命に向き合う機会を得ることが必要である。移植医療を題材とした継続的な授業を通して、「いのち」について、友人や現在の家族、そして将来の家族と話し合うことができる生徒が一人でも多く育ち、社会の認識が深まっていくことを願っている。

【文献】

- 1) 瓜生原葉子：医療組織のイノベーション；プロフェッショナルリズムが移植医療を動かす，中央経済社，東京，2012.
- 2) Burroughs TE, et al：The stability of family decisions to consent or refuse organ donation：Would you do it again? Psychosom Med 60：156-162, 1998.
- 3) Harris RJ, et al：Consenting to donate organs：whose wishes carry the most weight? J Appl Soc Psychol 21：3-14, 1991.
- 4) Tymstra T, et al：Experience of bereaved relatives who granted or refused permission for organ donation. Fam Pract 9：141-144, 1992.
- 5) 山梨八重子：中学生を対象にした「脳死・臓器移植」授業プログラムの開発とその評価. 熊本大学教育実践研究 28：65-74, 2011.
- 6) 槇本直子：高校生の生命観；高3「生物」授業での意識調査より（理科）（教科研究）. 名古屋大学教育学部附属中等学校紀要 37：66-74, 1992.
- 7) 鈴木哲也：理科教育における生命倫理の授業開発（1）：「脳死と心臓死」から「クローンとES細胞」への連続した授業を通して. 埼玉純真短期大学研究論文集2：73-79, 2009.
- 8) 内田隆，福井智紀：参加型テクノロジーアセスメントの手法を利用した理科教材の開発；臓器移植法案を題材としたシナリオワークショップの実践. 日本理科教育学会理科教育学研究 53：229-239, 2012.
- 9) 一柳武，他：総合的学習に向けての現代社会の試み，東京学芸大学附属高等学校大泉校舎研究紀要 24：1-18, 1999.
- 10) 平田渉：「いのち」を考える授業の実践；臓器移植を題材にした特別活動. 横浜国大言語教育研究 13：21-33, 2000.
- 11) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説；特別の教科道徳編，2017.
- 12) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説；保健体育編，2017.
- 13) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説；保健体育編，2018.
- 14) 瓜生原葉子：行動科学でより良い社会をつくる；ソーシャルマーケティングによる社会課題の解決，文真堂，東京，2021.
- 15) 日本学術会議臨床医学委員会移植・再生医療分科会：提言；我が国における移植医療と再生医療の発展と普及，2020.
- 16) 厚生労働科学研究費補助金移植医療基盤整備研究事業「小児からの臓器提供に必要な体制整備に資する教育プログラムの開発」研究班：「生命の尊さ」を伝える広場ホームページ.
<https://www.seimeisonchou.com/>